

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01762

研究課題名（和文）メンタルヘルスクア受診行動の適正化のための心理教育プログラムの開発と有効性の検証

研究課題名（英文）Development and validation of a psychoeducational program to optimize mental health care-seeking behavior

研究代表者

平井 啓 (Hirai, Kei)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：70294014

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：実態調査により、受診経験者は受診の利得と非受診の損失をより感じる事がわかった。また、異なるメッセージによって受診意図に差があること、メッセージによって受診意図や対処法に差があることが明らかになった。これらの調査結果に基づき、個別メッセージの配信やストレスマネジメント研修、心理教育教材などの介入内容を開発した。産業分野および教育分野での介入により、産業分野ではストレスには変化しないものの、セルフケアコンテンツの視聴率上昇や一部企業での専門機関利用者数の増加が見られた。教育分野では研修やコンテンツ提供によりストレス改善において有意な変化は見られなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、メンタルヘルス不調者が早期に不調を自覚し、迅速にメンタルヘルスクアの専門家への相談及び受療するために、ソーシャルマーケティングと行動経済学的手法を用いて、対象者の特性、つまり個人差を考慮したメッセージやコンテンツを開発した上で、早期相談・受療行動の強化に効果的なコミュニケーション方法を特定し、それを用いた介入を行った。その結果、セルフケアコンテンツを一定視聴していることや、専門機関への利用へ行動を移した対象者の存在も明らかとなった。本研究は、メンタル不調者の早期発見、早期受療に向けた研究の一助となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The fact-finding survey revealed that those who had received medical examinations perceived more gains from receiving medical examinations and more losses from not receiving medical examinations. It also revealed differences in the intention to receive medical examinations depending on the message and differences in the intention to receive medical examinations and coping methods depending on the message. Based on these findings, intervention content such as the delivery of individual messages, stress management training, and psychoeducational materials were developed. Interventions in the industrial and educational fields revealed that although there was no change in stress in the industrial field, the rate of viewing self-care content and the number of users of specialized institutions increased in some companies. There was no significant change in stress in the education sector due to training and content provision.

研究分野：健康心理学

キーワード：メンタルヘルス 受療勧奨 心理教育 教育プログラム開発 実践研究

1. 研究開始当初の背景

現在わが国では、様々な現場でメンタルヘルス不調への対応が求められている。しかしながら従来のメンタルヘルス対策では、精神疾患等への治療や早期介入、および復職・復学支援する際に必要な情報を周囲に提供する取り組みなど、発症後の対応に焦点が置かれることが多く、不調の発症予防や早期発見に対するセルフチェックや周辺支援トレーニングといった点への介入は少ない。

受療行動については、不調が発生してから専門機関を受診・受療するまでの期間(Duration of Untreated Illness : 以下 DUI とする) が短いことが、統合失調症・双極性障害・うつ病・不安障害などの精神障害を含むメンタルヘルスの問題において、予後の改善と関連があるという報告がある。つまり、メンタルヘルスの問題を解決するためには、症状が重症化した者はもちろん、重症化する前の者も含めて(本研究ではこれを「メンタルヘルス不調者」と定義する)早期に専門家へつながるためのアプローチが非常に重要である。

これまでのメンタルヘルスに関する研修や教材では、うつ病の説明と適切な対処が内容の中心になることが多かった。一方で、うつ病を含む気分障害を引き起こす原因やメンタルヘルス不調時の対処行動の個人差に焦点が当てられることは少ない。しかし、実際に現場で最初に対応する者にとっては、この個人差を知ることが重要である(例: 状況を楽観視する者と状況を悲観視する者で、伝わりやすい声かけは異なる)。本研究ではこの「個人差」として、従来うつ病の予防・治療の領域で注目されてきた認知・行動的特性をとりあげる。職場における不適応の背景には個人が持っている発達特性が影響していること、日本の大学の56.2%で発達障害(診断書あり・なしを含む)のため支援を求める学生が1名以上在籍していることから、発達特性(発達障害の診断という意味ではなく、情報処理様式の個人差)も対象とする。

よって、本研究の学術的な問いは、「メンタルヘルス不調者に対して、発達特性を含む個人や集団の認知・行動的特性を踏まえた心理教育的介入を、個人や個人を取り巻く環境を包括しながら仕組み化して行うことで、メンタルヘルス不調の早期に、適切なメンタルヘルスケアの利用や専門機関受療のDUIを短縮させることができる。それによりうつ病などの精神障害の発症を予防することができるのではないか?」である。

2. 研究の目的

本研究では、精神疾患等を発症前も含むメンタルヘルス不調者が早期に不調を自覚し、迅速にメンタルヘルスケアの専門家への相談及び受療に移行するための心理教育的介入プログラム開発を行う。ソーシャルマーケティングと行動経済学的手法を用いて、対象者の特性(個人差)を考慮したメッセージやコンテンツを開発した上で、早期相談・受療行動の強化に効果的なコミュニケーション方法を特定し、それを用いた介入を行う。

具体的には、1) 対象者の認知的・行動的・発達の特性に基づくセグメンテーションのアルゴリズム開発を行い、2) 早期メンタルヘルスケア受療を促すメッセージとコンテンツを作成し、セグメンテーションと開発資材との効果的な組み合わせを検証する。さらに、3) 上記の受療行動促進に有効なメッセージとコンテンツを含む、メンタルヘルス・リテラシー獲得を目指すリーフレットと、それに加えてメンタルヘルス不調の簡易スクリーニングツールから構成するウェブサイトからなる心理教育的介入プログラムを開発し、それらを用いて4) 企業や教育機関を対象とした心理教育的ヘルスプロモーション介入を行い、その効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) 実態調査

WEB を利用した調査を 4 件実施した。

メンタルヘルス受療行動に関する利得と損失認知に関する調査

インターネット調査会社に登録されているモニターの 20~80 代の就労者 1100 名(メンタルヘルスケアの機関の受診経験あり 330 名、メンタル不調経験ありだが受診経験なし 330 名、メンタル不調経験なし 440 名)を対象にメンタルヘルスケアの専門機関への「受診する・しない」ことに対し、行動経済学における損失回避性と現状バイアスの概念から利得(現在・将来)と損失(現在・将来)の評定などの項目について回答を求めた。

受診勧奨に関するメッセージの効果に関する調査

20~79 歳で就労しており、過去 5 年以内に専門機関の受診経験がない、調査会社の登録モニター 5500 名が web 上の実験に協力した(男性 3563 名、女性 1937 名、平均年齢 49.12 歳)。各群 550 名の被験者間デザインで、メンタルヘルス不調を呈した主人公の短文を提示して受診意図を尋ねた後、10 種類のメッセージを提示し、メッセージ前後の受診意図の変化を測定した。

受診勧奨メッセージが受診準備行動に与える効果検討(の追跡調査)

の対象者のうち、追跡調査が可能であった 3937 名に対し、WEB 調査後の影響を正確に測定するため、6 ヶ月後に実施した。提示した項目は、対処法略意図、最近半年の受診行動、メンタルヘルス脅威性尺度、脳疲労尺度、新型コロナウイルス感染症への脆弱性、K6(抑うつ指標)であった。対処法略意図は、脳疲労尺度(足立他, 2019)において各因子から負荷量が高かった項目を用いて作成したストーリーを読了後、このような状態において、後述する対処法略をとろうとする意図を 4 件法で尋ねた。対処法略は、専門家受診・休息または睡眠・上司や同僚への相談・自己努力での解決の 4 つであった。

メンタルヘルス不調時におけるラベリングの効果検討

調査時点で就労している成人で、メンタルヘルス専門機関を受診した経験がない人を対象とし、1709 名(男性 856 名、女性 853 名、平均年齢 50.21 歳)を調査対象者として採用した。脳疲労尺度をもとにしたストーリーを提示し、群分けした 8 つのグループに対して 8 種類の異なるメッセージを提示した。その際、8 つのグループは人数性別について 200 人(男女 100 人ずつ)を基準として均等に割付した。8 つのグループについて、それぞれ 8 つのメッセージ(「脳疲労」「脳疲労+将来損失」「脳疲労+効力感」「心の病」「精神疾患」「神経機能異常」「認知機能障害」「脳の不調」)を提示した。

(2) 介入プログラムの開発

これまでの実態調査の成果をもとに、不調者の受療に対するコミットメントを高めるために、簡易な脳疲労状態のセルフチェックと個人特性の評価を行えるコンテンツ、セグメントに対応したメッセージとコンテンツを含むリーフレットを含む心理教育的介入プログラムを開発した。

(3) 介入プログラムの効果検証

今年度はこれまでの調査結果から示唆された知見を生かし、受診勧奨メッセージやメンタルヘルスやストレスマネジメントに関するコンテンツを用いて、3 つの法人に対し、介入研究を实

施した。1社は研修プログラムを介入に含む中断時系列デザインで、他の2社は追跡調査を含めた前後比較調査にて効果検討を行った。

産業分野での介入研究

1社は研修プログラムを介入に含む中断時系列デザインで、他の2社は追跡調査を含めた前後比較調査にて効果検討を行った。

教育分野での介入研究

教育分野においても適用可能な介入プログラム開発を目指し、小学校と中学校の2つの学校施設の教職員を対象とした研修およびメンタルヘルスやストレスマネジメントに関するコンテンツを用いた介入研究の効果検討を実施した。

4. 研究成果

(1) 実態調査

メンタルヘルス受療行動に関する利得と損失認知に関する調査

受診する・しない×損失・利得×現在・将来の8つのカテゴリについて、5項目ずつの尺度が開発された。これを用い、メンタルヘルス不調経験の有無と専門機関受診経験の有無による利得と損失の認識の違いを分析したところ、専門機関の受診経験がある群は、受診することの利得と受診しないことの損失を、不調経験があるが受診経験がない群は受診することの現在の損失、不調経験がない群は受診しないことの利得をより感じていることが明らかとなった。

受診勧奨に関するメッセージの効果に関する調査

分散分析の結果、2次の交互作用が有意であった [$F(4,5489)=4.42, p=0.001$]。下位検定の結果、提示後受診意図は、1)心の病・脳疲労とともに、将来損失群は現在利得群・将来利得群・規範群よりも、そして現在損失群は現在利得群・規範群よりも受診意図が有意に高かった。2)将来利得群・現在利得群・規範群において、脳疲労と比較して心の病の受診意図が有意に高かった。なお、前後×不調理由、前後×フレームの1次の交互作用、前後の主効果もそれぞれ有意であった。メッセージ効果に関しては、これまで「脳」と「心」の2種類の言葉が与える影響について着目してきたが、本調査によって「疲労」と「病気」という表現の違いによっても差が生じる可能性が示された。

受診勧奨メッセージが受診準備行動に与える効果検討(の追跡調査)

前年度調査の対象者のうち、追跡調査が可能であった3937名(男性2664名、女性1273名、平均年齢50.58歳、SD=10.05)から回答を得られた。対処法略の種類を独立変数とし、一元配置分散分析を行ったところ、その意図に有意な差が見られた($F(3,3936)=1428.54, p=.000$)。休息や睡眠く、ついで自己努力での解決の意図が高かった。それに対して、同僚・上司・専門家への援助要請は、他の意図よりも有意に得点が低い。また、前回調査で受診が必要な状態であった987名のうち、半年間に専門機関を受診した者は103名であった。そこで、受診者と非受診者の違いを検定したところ、いくつかの変数で有意差が見られた。したがって、メンタルヘルス専門機関の受診に繋げるためには、症状を自覚することや周囲のサポート量が影響を与えることが考えられる。一方で、症状の悪化や回復などの変化は受診に影響を及ぼさないこと、SNSでの悩み相談は専門家機関の利用を遠ざけることが示された。

メンタルヘルス不調時におけるラベリングの効果検討

「脳疲労」「心の病」「精神疾患」「神経機能異常」「認知機能障害」「脳の不調」の6つのメッセージグループ間において心理的リアクタンスに差が見られるかを検討するために分散分析を行った結果、すべてにおいて $p<.001$ の有意な差が見られた($F(5,1275)=2.49-12.79$)。多

重比較を行った結果、「ショック」「悲しい」の項目では「神経機能異常」と「認知機能障害」で高い特点を示した。「脳疲労」のメッセージはもっともネガティブな印象が低かった。

また「脳疲労」「脳疲労+将来損失」「脳疲労+効力感」の3メッセージグループ間において心理的リアクタンスに差異が見られるかを検討した結果、有意な差が見られた($F(2,639)=3.10-40.29$)。多重比較の結果、「脳疲労+将来損失」のメッセージグループが最も大きい心理的リアクタンスを示した。次にメッセージグループごとに対処行動の意図が異なるかを調べた結果、専門家受診意図は「精神疾患」「神経機能異常」で高くなり、「脳疲労」は最も低くなることわかった。また、睡眠・休息意図は「脳疲労」メッセージで高くなり、「認知機能障害」で低くなることが判明した。さらに、メッセージによって回復可能性の認知が異なるかを検討したところ、「神経機能異常」のメッセージは「治らないと思った」と考える傾向が強かった。

(2) 介入プログラムの開発

アンケート調査の回答結果により該当するセグメントのアルゴリズムを開発し、各対象者に応じた個別メッセージの配信やストレスマネジメント研修および心理教育教材を介入内容とし、介入前後の状態(ストレス度合い、抑うつ度、ストレスマネジメント行動、専門家への受診や相談行動)を比較することとした。

(3) 介入プログラムの効果検証

これまでの調査結果から示唆された知見を生かし、受診勧奨メッセージやメンタルヘルスやストレスマネジメントに関するコンテンツを用いて、介入研究を実施した。

産業分野で介入研究

3法人の計377名が調査に参加した。ストレス状態は、有意差のある変化は見られなかった。一方で、セルフケアのコンテンツの視聴割合は最大38.8%であった。また研修の実施および個別メッセージを送付した企業では、職場の窓口相談などを含めた専門機関への合計利用者数は、介入直後の調査において、のべ10名であった。

教育分野での介入研究

教育分野においても適用可能な介入プログラム開発を目指し、小学校、中学校、の2つの学校施設の教職員を対象とした研修およびメンタルヘルスやストレスマネジメントに関するコンテンツを用いた介入研究の効果検討を実施した。小学校では、1度のストレスマネジメントに関する研修とコンテンツ提供の前後比較、中学校においては、2度の研修と個別結果を含めたコンテンツ提供による介入を行い、追跡調査を含めた全5回の前後比較調査を行った。なお、小学校と中学校においては、紙媒体での個別メッセージおよびコンテンツの提示を行った。その結果、合計82名が調査に参加した。ストレス状態は、有意差のある変化は見られなかった。コンテンツの視聴割合は11.2%であった。

今後は、対象者へ効果的なアプローチや情報提供の方法などを、検討していく必要があると思われる。

<引用文献>

足立浩祥、平井啓、村中直人、小林清香、立石清一郎、小川朝生、谷向仁、谷口敏淳、原田恵理、山村麻予(2019)「高ストレス状態の測定ツールとしての認知機能アセスメント尺度の開発」平井啓, 労災疾病臨床研究事業費補助金「治療と職業生活の両立におけるストレスマネジメントに関する研究」報告書 p29-34

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 19件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 Matsui Tomoko, Hirai Kei, Gondo Yasuyuki, Sato Shinichi	4. 巻 50
2. 論文標題 Understanding help-seeking behaviour in relation to psychosocial support services among Japanese cancer patients	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Clinical Oncology	6. 最初と最後の頁 1175 ~ 1181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/jjco/hyaa086	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Adachi Hiroyoshi, Yamamura Asayo, Nakamura-Taira Nanako, Tanimukai Hitoshi, Fujino Ryohei, Kudo Takashi, Hirai Kei	4. 巻 51
2. 論文標題 Factors that influence psychiatric help-seeking behavior in Japanese university students	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 102058 ~ 102058
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ajp.2020.102058	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 平井啓・山村麻予・鈴木那納実・小川朝生	4. 巻 16
2. 論文標題 高齢患者のがん治療方針における意思決定困難に関する要因に関する探索的研究 医師に対するインタビューから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Palliative Care Research	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 本岡寛子・赤羽紗季	4. 巻 5
2. 論文標題 勤務時間外の連絡に対する意識が心理的ディタッチメントと職業性ストレスに与える影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近畿大学心理臨床・教育相談センター紀要	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mishima Masayoshi, Adachi Hiroyoshi, Mishima Chieko	4. 巻 63
2. 論文標題 Landmark Analysis Exploring the Optimal Period for Intensive Monitoring After Return to Work for Employees With Sickness Absence Due to Common Mental Disorders	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Occupational and Environmental Medicine	6. 最初と最後の頁 e21 ~ e25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1097/JOM.0000000000002073	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsuda Yoshinobu, Tanimukai Hitoshi, Inoue Shinichiro, Inada Shuji, Sugano Koji at al.	4. 巻 50
2. 論文標題 JPOS/JASCC clinical guidelines for delirium in adult cancer patients: a summary of recommendation statements	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Clinical Oncology	6. 最初と最後の頁 586 ~ 593
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/jjco/hyaa003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Adachi Hiroyoshi, Yamamura Asayo, Nakamura-Taira Nanako, Tanimukai Hitoshi, Fujino Ryohei, Kudo Takashi, Hirai Kei	4. 巻 51
2. 論文標題 Factors that influence psychiatric help-seeking behavior in Japanese university students	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 102058-102058
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ajp.2020.102058	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Araki Manabu, Shinzaki Shinichiro, Yamada Takuya, Tanimukai Hitoshi at al.	4. 巻 15
2. 論文標題 Psychologic stress and disease activity in patients with inflammatory bowel disease: A multicenter cross-sectional study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0233365
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0233365	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ogawa Masahiro, Hayashi Yoriko, Sawada Tatsunori, Kobashi Mizuki, Tanimukai Hitoshi	4. 巻 2020
2. 論文標題 Psychological Effects of Hands-On Training Using Public Transportation among Inpatients with Physical Disabilities: Analysis of the Self-Efficacy and Perception of Occupational Enablement Using a Multimethod Design	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Occupational Therapy International	6. 最初と最後の頁 1~8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1155/2020/1621595	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ogawa Masahiro, Shirai Haruna, Nishida Seiji, Tanimukai Hitoshi	4. 巻 75
2. 論文標題 Rasch Analysis of the Assessment of Quality of Activities (A-QOA), an Observational Tool for Clients With Dementia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The American Journal of Occupational Therapy	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5014/ajot.2021.039917	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Morino Tappei, Shinohara Yuki, Niu Qian, Shimoura Kanako, Tabata Ami, Hanai Akiko, Ogawa Masahiro, Kato Toshihiro, Tanimukai Hitoshi, Tsuboyama Tadao, Matsuoka Mari, Adachi Soichi, Aoyama Tomoki	4. 巻 10
2. 論文標題 Perception Gap in Health-Related Quality of Life Between Young Adult Survivors of Childhood Cancer and Their Family	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Adolescent and Young Adult Oncology	6. 最初と最後の頁 735 ~ 739
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1089/jayao.2020.0232	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maeda Isseki, Inoue Shinichiro, Uemura Keiichi, Tanimukai Hitoshi et al.	4. 巻 24
2. 論文標題 Low-Dose Trazodone for Delirium in Patients with Cancer Who Received Specialist Palliative Care: A Multicenter Prospective Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Palliative Medicine	6. 最初と最後の頁 914 ~ 918
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1089/jpm.2020.0610	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田畑阿美、谷向仁、上田敬太、山脇理恵、村井俊哉	4. 巻 40
2. 論文標題 視線計測装置を用いた評価が症状理解に有用であった~症候群を呈した脳腫瘍患者一例の介入経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上真一郎、谷向仁、松田能宣、足立浩祥、稲田修士、岡本禎晃、菅野康二、同谷知香子、蓮尾英明、吉村匡史、和田佐保、稲垣正俊、奥山徹	4. 巻 34
2. 論文標題 せん妄の臨床研究から見た症例報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 185-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村井俊哉、井上真一郎、倉田明子、谷向仁	4. 巻 6
2. 論文標題 コンサルテーション・リエゾン精神医学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科臨床 Legato	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田朱公、谷向仁	4. 巻 49
2. 論文標題 意識障害と注意障害	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 327-332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷向仁	4. 巻 49
2. 論文標題 怒り・衝動行為とその対応	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 1943-1952
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Adachi Hiroyoshi, Yamamura Asayo, Nakamura-Taira Nanako, Tanimukai Hitoshi, Fujino Ryohei, Kudo Takashi, Hirai Kei	4. 巻 51
2. 論文標題 Factors that influence psychiatric help-seeking behavior in Japanese university students	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 102058 ~ 102058
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ajp.2020.102058	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林 清香, 平井 啓, 谷向 仁, 小川 朝生, 原田 恵理, 藤野 遼平, 立石 清一郎, 足立 浩祥	4. 巻 32
2. 論文標題 身体疾患による休職経験者における職場ストレスと関連要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合病院精神医学	6. 最初と最後の頁 403-309
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本岡寛子・植田恵未・大対香奈子・堀田美保・直井愛里	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 大学への期待とイメージが集団同一視・大学適応感に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近畿大学総合社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 直井愛里・大対香奈子・堀田美保・本岡寛子	4. 巻 30
2. 論文標題 大学教育におけるコミュニケーションスキルトレーニングの検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近畿大学教育論叢	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ogawa. A., Okumura. Y., Fujisawa. D., Takei. H., Sasaki. C., Hirai. K., et al.	4. 巻 27(2)
2. 論文標題 Quality of care in hospitalized cancer patients before and after implementation of a systematic prevention program for delirium: the DELTA exploratory trial	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Supportive Care in Cancer	6. 最初と最後の頁 557-565
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平井啓	4. 巻 15(2)
2. 論文標題 働き方改革における行動科学の役割	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 安全医学	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsui. T., Hirai. K., Shokoji. M., Kanai. N., Yoshizaki. A. to. N., & Tokuyama. M.	4. 巻 49(3)
2. 論文標題 Problems, goals and solutions reported by cancer patients participating in group problem-solving therapy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Clinical Oncology	6. 最初と最後の頁 245-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桜井なおみ, 平井啓, 原田恵理
2. 発表標題 働くがん患者の心と身体の変化に関する研究
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア学術大会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林清香, 平井啓, 立石清一郎, 桜井なおみ, 足立浩祥, 谷口敏淳, 原田恵理
2. 発表標題 治療と職業生活の両立におけるストレス構造分析 支援者インタビュー調査
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア学術大会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平井啓, 足立浩祥, 村中直人, 小林清香, 小川朝生, 谷向仁, 谷口敏淳, 山村麻予, 原田恵理, 藤野遼平, 堀井健司, 桜井なおみ, 立石清一郎
2. 発表標題 治療と職業生活の両立支援における高ストレス状態の測定ツールとしての脳疲労尺度の開発
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア学術大会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平井啓, 小林清香, 桜井なおみ, 浅野健一郎, 上木誠吾, 藤野遼平, 堀井健司, 原田恵理, 足立浩祥, 立石清一郎
2. 発表標題 治療と職業生活の両立におけるストレス構造分析 企業支援者インタビュー調査
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア学術大会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平井 啓, 山村 麻予, 藤野 遼平, 中村 菜々子, 本岡 寛子, 足立 浩祥, 谷口 敏淳, 谷向 仁
2. 発表標題 メンタルヘルス受診意思決定モデルの行動経済学的検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅生 聖子, 平井 啓
2. 発表標題 母親の子育不適応予測のための包括的な心理社会的要因構造化の試み
3. 学会等名 日本心理学会第84回
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山村麻予, 平井啓, 小川朝生, 鈴木那納実
2. 発表標題 医療者を対象とした意思決定支援に関する教育プログラムの効果
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平井 啓, 山村麻予, 金子茉央, 藤野遼平, 三浦麻子
2. 発表標題 新型コロナウイルスに対する感染予防行動生起にあたる脅威性認知の影響について
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平井啓, 足立浩祥, 立石清一郎, 谷向仁, 小林清香, 山村麻予
2. 発表標題 脳疲労尺度におけるプレゼンティズムと高ストレス状態の関連について～妥当性と利用方法の検討～
3. 学会等名 第27回行動医学会学術総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村菜々子, 山村麻予, 藤野遼平, 平井啓, 足立浩祥, 本岡寛子, 谷口敏淳, 谷向仁
2. 発表標題 メンタルヘルス不調状態への受診勧奨メッセージの違いが受診意図に及ぼす影響～不調理由の説明とフレーミングの組み合わせの観点から～
3. 学会等名 第27回行動医学会学術総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山村麻予, 平井啓, 中村菜々子, 藤野遼平, 足立浩祥, 本岡寛子, 谷口敏淳, 谷向仁
2. 発表標題 一般就労者におけるストレス症状の対処方略ーメンタルヘルスケア受診適正化に向けて
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷向 仁
2. 発表標題 急性期病院におけるせん妄・認知症対策 ～緩和ケアチームにおける精神科医の立場から～
3. 学会等名 第4回日本老年薬学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷向 仁
2. 発表標題 脳器質的要因を背景とした怒り ~ 認知症、せん妄、脳転移を中心に~
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア 合同学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小橋美月, 松岡真里, 足立壯一, 滝田順子, 小川真寛, 谷向仁
2. 発表標題 小児がん医療における 退院前多職種連携の実態調査
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア 合同学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷向 仁
2. 発表標題 リエゾン領域に見られる様々な認知機能障害 ~抑うつと絡めて~
3. 学会等名 Consultation-Liaison Psychiatrists Meeting
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷向 仁
2. 発表標題 急性期病院における認知症診療の課題 実態調査から見えてきたこと -
3. 学会等名 第116回日本精神神経学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大山覚照, 滝本佳予, 沈沢欣恵, 谷向 仁
2. 発表標題 ガバベンチンの抗せん妄効果についての後ろ向き観察研究
3. 学会等名 第33回日本総合病院精神医学会総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 赤澤麻衣子, 谷向仁, 杉田智子, 大沢恭子, 北田徳昭, 恒藤暁, 中川貴之
2. 発表標題 常用量を超えるベンゾジアゼピン系薬剤を短期間で中止できた高齢がん患者の一症例
3. 学会等名 第42回日本病院薬剤師会近畿学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大武 陽一, 井上 智恵, 今西伸子, 清田 敦彦, 坂口 美佳, 高橋 朗, 谷向 仁, 田中 順也, 中尾 弘美, 中野 明子, 中原 宣子, 藤田 譲, 三上 聡司, 米本 重夫
2. 発表標題 地域のサイコネフロロジーを育むには?~「南大阪」から「南」を取って、再出発~
3. 学会等名 第31回日本サイコネフロロジー学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷向 仁
2. 発表標題 身体疾患を抱える人のこころを理解する ~慢性疾患に共通する点、透析患者に特有な点をも踏まえて~
3. 学会等名 第94回大阪透析研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小橋美月, 谷向 仁, 井沢和子, 市原香織, 小椋奈津子, 小川真寛, 馬場千夏, 華井明子, 内海絢女
2. 発表標題 がん医療における認知機能障害に対する患者、家族向けのリーフレットの作成
3. 学会等名 第24回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tanimukai H.
2. 発表標題 CACD:Attitude of medical staff in cancer care toward symptoms in cancer survivors , and our current approaches
3. 学会等名 第17回日本臨床腫瘍学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林清香, 平井 啓, 谷向 仁, 小川朝生, 原田恵理, 藤野遼平, 立石清一郎, 足立浩祥
2. 発表標題 身体疾患治療からの復職後に生じる職場不適応に関する研究
3. 学会等名 第32回日本総合病院精神医学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部光希・本岡寛子
2. 発表標題 発達に困難さを抱える子どもの保護者が抱く学習場面での心配
3. 学会等名 日本心理臨床学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三嶋正芳、足立浩祥、三嶋千恵子、清水政彦、中島淑貴
2. 発表標題 メンタルヘルス不調者の復職から3年間の就業継続率 休業回数の影響
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平井啓、足立浩祥、原田恵理、藤野遼平、小林清香、谷向仁、立石清一郎
2. 発表標題 両立支援において復職後のパフォーマンスに影響を与える要因について～抑うつ状態並びに脳疲労状態の観点から～
3. 学会等名 第26回日本行動医学会学術総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平井 啓・足立 浩祥・原田 恵理・藤野 遼平
2. 発表標題 高ストレス状態の測定ツールとしての認知機能アセスメント尺度の開発
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山村麻予、平井啓、村中直人、上木誠吾、原田恵理、藤野遼平
2. 発表標題 成人期における生活・業務の認知行動特性尺度の開発 勤労パフォーマンスとストレスマネジメントの観点から
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 立石清一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 231
3. 書名 産業保健スタッフに必要な疾患の知識と最新の治療法：両立支援に欠かせない	

1. 著者名 谷向仁	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中外医学社	5. 総ページ数 191
3. 書名 がんと認知機能障害 気づく、評価する、支援する	

1. 著者名 小山 敦子 編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 羊土社	5. 総ページ数 215
3. 書名 がん診療における精神症状・心理状態・発達障害ハンドブック	

1. 著者名 下山晴彦（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文光堂	5. 総ページ数 896
3. 書名 公認心理師技法ガイド	

1. 著者名 平井啓・本岡寛子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 131
3. 書名 ワークシートで学ぶ問題解決療法	

〔出願〕 計1件

産業財産権の名称 情報処理方法、予想モデルの作成方法、情報処理装置、情報処理システム、情報処理装置の制御プログラム、対象者端末の制御プログラム	発明者 平井啓、大竹文雄、 足立浩祥、金子茉央	権利者 同左
産業財産権の種類、番号 特許、2022-052455	出願年 2022年	国内・外国の別 国内

〔取得〕 計0件

〔その他〕

http://noumg.grappo.jp

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	足立 浩祥 (Adachi Hiroyoshi) (00303785)	大阪大学・キャンパスライフ健康支援・相談センター・准教授 (14401)	
研究分担者	谷向 仁 (Tanimukai Hitoshi) (60432481)	京都大学・医学研究科・准教授 (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	本岡 寛子 (Motooka Hiroko) (70434876)	近畿大学・総合社会学部・教授 (34419)	
研究分担者	山村 麻予 (Yamamura Asayo) (70745190)	関西福祉科学大学・健康福祉学部・講師 (34431)	
研究分担者	中村 菜々子 (Nakamura Nanako) (80350437)	中央大学・文学部・教授 (32641)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関